

文学と法（その十七）

——ペーター・ハントケの場合——

一

平山 令二

オーストリアの作家、ペーター・ハントケ（一九四二〜）が二〇一九年のノーベル文学賞を受賞したことは日本でも報道されたが、それほど注目を浴びたとも思えない。なにしろ、これまでハントケは日本ではヴィム・ベンダース監督「ベルリン・天使の詩」の原作者としてある程度知られていたものの、日本語に訳された小説も限られていたからだ。

しかしながら、ハントケのノーベル文学賞受賞に対しては、オーストリアやドイツといったドイツ語圏だけでなく、フランス、アメリカなど広く欧米の文学者や知識人からの反対論があったことは、日本においてもある程度は報

道された。ハントケが一九九二年から始まったユーゴスラビア内戦において、西欧文化人としてはほとんどただひとりと言ってよいほど異例なことではあるが、セルビア寄りの発言を続けたからである。セルビア軍によるボスニアにおける民族虐殺に対してNATO軍のベオグラード空爆が行われたときも、ハントケは空爆に抗議した。このようなハントケのセルビア擁護に対して、西欧知識人の多くが激しい批判を加えた。ハントケはジェノサイドに荷担した文学者という汚名を蒙ることになったのだ。

そのような過去のあるハントケがよりにもよってノーベル文学賞を受賞したのだから、ノーベル文学賞選考委員会に批判の声が集中した。そうでなくても、ノーベル文学賞選考委員会は、すでに関係者のセクハラ疑惑のために信用を失っていて、一年間文学賞の選考を中止するという状況に追い込まれていたところだったので、二重の打撃であった。

ハントケのノーベル文学賞受賞式は、彼のセルビア寄りの姿勢を批判してきた西欧のジャーナリズムにとって、ハントケの姿勢が変わっていないかを質す絶好の機会だった。授賞式前日の記者会見で、ハントケは記者たちの批判的な質問にさらされた。しかしながら、ハントケは挑発的に自らのセルビア寄りの姿勢を明らかにして、逆に反セルビアのジャーナリズムに批判を返すのだった。これまでなかったような險悪なノーベル文学賞記者会見であった。

しかし、翌日の受賞記念講演は、うって変わって詩的な内容のものであった。ハントケは自らの作品を朗読し、政治的問題を超越したような態度を取った。前日の險悪な記者会見の模様とはまったく異なるハントケの世界を自作自演した。さて、記念講演で私が注目したのは、スロヴェニア人であった母親と『反復』という長編小説について語っていたことである。『反復』という作品は、フィクションの形で若き日の自らのスロヴェニアへの旅を語っている。

母親という実在の存在とフィクションの形でのスロヴェニアの旅（原形は自分のスロヴェニア旅行）をノーベル文学賞受賞の機会で、中心的に取り上げたのである。

そこで、今回ペーター・ハントケにおけるスロヴェニアの意味を考えてみたいと思うが、その際に本シリーズのテーマである「文学と法」という視点も取り入れてみたい。ハントケは実はクラゲンフルト大学法学部で学んでいる。もともと、中退しているのであるが。しかし、ハントケと法学という結び付きは、まったくありそうもないものである。ハントケを世に出したのは、「観客罵倒」という「ドラマ」である。「観客罵倒」とは、まさしくその名の通り舞台に出てきた俳優たちが、ひたすら目の前に座っている観客たちを罵倒するのである。舞台で俳優により演じられる世界とそれを見ている観客たちの世界は切れている、というのが演劇の約束事である。その約束事を完全に無視してしまうペーター・ハントケが、社会のもっとも重要な約束事である「法」を学ぶ法学部に在籍した、という事実には驚かざるを得ない。ハントケには、国家により押しつけられるあらゆる法を無視してしまうアナキストのイメージが似つかわしいからだ。しかし、とにかくハントケが法学を短い期間でも学んだという事実をまず確認しておきたい。ハントケと法というテーマは、したがってまったく荒唐無稽なものではないはずだ。

二

ペーター・ハントケと法を考えるため、本論では長編小説『反復』を取り上げたい。しかし、その前にハントケのノーベル文学賞受賞記念講演を見てみよう。というのも、記念講演の中心テーマは、スロヴェニア人であった母親、

そして母親の家族、具体的には兄弟のことであり、その関連で『反復』にも言及されているからだ。

ハントケは講演の初めに、一九八二年に初演された「村々を超えて」という詩的ドラマの一部を朗読し、スロヴェニア人の母親のことを話し始める。

私の子ども時代に、私の母は、時間があれば、また時間が許すならば、スロヴェニア語で「スターラ・ヴァス」という「古い村」の人々について話してくれた。それは物語ではなく、短いが、少なくとも私の耳には聞いたことのない事件だった。母がこういった出来事を同時に私の兄弟にも話したのかもしれない。しかし、私はその都度母のただ一人の観客であるような気がした。(中略)

一九四三年八月末から九月初め、と母は語った、長兄グレーゴルが数週間の「帰郷休暇」のためロシア・クリミア半島の前線から戻ってきた。長兄が郵便バスから降りて最初に出会った人物は、この地域の戦死公報の配達員だった。配達員はちょうど村に向っている途中で、末弟がツンドラ地帯で「祖国のための英雄死」を遂げた、という不幸な報せをもたらすところだった。死の使いは思いがけず遺族のひとりをすぐ目の前に見たので、残りの道を節約することができた。彼は、帰郷休暇をもらった兵士、グレーゴルに戦死公報を手渡した。それからの出来事は尋常なものではなかった。グレーゴルは家に入ると、歌声と歓声で出迎えられた。私の母は若い頃に歓声をあげることは滅多になかったのだが。グレーゴルは休暇で家にいる間、戦地からの手紙で「ツンドラの若者」を自称していた弟の死を家族にずっと黙っていた。この休暇期間グレーゴルは、語り手である母の言葉によれば、「家庭のなかでいちばん家庭的なもの」を静かに避けた、家、両親、姉妹、そして自分の村、スターラ・ヴァスまでも。そして朝から晩まで彷徨

した、時には夜中まで、近隣の村々、エンツエルナ・ヴァス、リパ、ルーダ、グローバスニツァ、デイエクシエ、リンコラハ、クルツァニエを。それらの村々でグレーゴルは知人のところで、あるいは取り分け見知らぬ人々のところで、母の言葉では「泣き明かした」というのだ。泣き明かしたって？ そう。「彼の涙は止まらなかった。けつして止まりそうもなかった。」そして、休暇が終わり戦地へのバスに向う途中で、グレーゴルは、ついて来ることをただ一人だけ許した妹に弟の戦死公報を手渡した。そして数週間後に、彼自身が「異国の土、そは死者の上に軽くあれ」(戦死公報、また墓地の銘盤に書かれた言葉)に埋葬された。

三

夜中に彷徨する母の兄、グレーゴルは『反復』において重要な意味を持つ。作者ハントケにとって、スロヴェニア人とは、まず母親マリアとロシア戦線で戦死した伯父グレーゴルのことであった。

『反復』という小説は単純な構造をしている。主人公の「私」であるフィリップ・コバルがギムナジウムの卒業時にしたスロヴェニアへの旅を二五年後に回想するという設定である。その旅は、同時にロシア戦線で行方不明になった年の離れた兄グレーゴルの若き日の足跡をたどる旅でもあった。ハントケ自身も、ギムナジウム卒業時にただひとりスロヴェニアへ旅している。その意味で、この作品はハントケの自伝的な作品である、と言っても許されるだろう。

ただ、フィリップ・コバルがハントケそのままでは示すフィクションとしての色づけもされている。実

際には、ハントケには兄がいなかった。グレーゴルは母の兄である。その他、小説ではフィリップの父もスロヴェニア人になっているが、ハントケの実父はドイツ軍兵士だった。

『反復』は、「曇りガラスの窓」「往來のない家畜道」「自由のサバンナと第九の国」の三章から成っている。時期は一九六〇年六月末のことである。

行方の知れない兄の跡を求めてイエッセニツェに着いたときから、四半世紀がたった——あるいは一日がたった。僕はまだ二十歳になる前で、学校の最終試験を終えたばかりだった。

フィリップは、スロヴェニア側の国境警備兵に話しかけられる。「Kobal」ってのは、踏ん張った両足の間とか歩幅って意味だぞ、そうやって足を開いて立っている人間のこともそう言うんだけどな」とドイツ語で国境警備兵は言った。そして、スロヴェニアにコバルという英雄がいたことを教えようとする。奇しくも行方不明になった兄と同じグレーゴル・コバルという名前で、一七一三年のトルミン農民大一揆の指導者だったが、翌年仲間たちとともに処刑された。スロヴェニアでは今でも彼の「凶々しさ」と「大胆さ」が語り継がれている。

フィリップは駅前の食堂に入るが、食堂のカウンターの上に掲げられた等身大以上の大きなチトーの肖像画に気づく。チトー元帥はフィリップを見下ろして、「私はお前を知っている」と言ったように聞こえた。フィリップは「でも僕は僕を知らないんだ」と答えようとする。

カウンターの後ろにウエイトレスが姿を見せたとき、フィリップは驚く。ウエイトレスの顔だけが薄暗いなかに見

えて、「その臉を見ていると、不意に不気味なくらいありと、母が目の前にいた」からだ。見知らぬウエイトレスに自分の母の姿がくつきりと見えるのだった。「母もまた少し前まではこんな歌うような声でしゃべった。」

このように、イエッセニツエの駅に着いて、駅前の食堂に入ってしまった。しばらく休むまでで、この小説の重要な登場人物であるふたりのスロヴェニア人、兄のグレーゴルと母のマリアが現れる。グレーゴルは二五〇年前の農民一揆指導者の名前で、母は食堂のウエイトレスの姿と振舞いで。また、スロヴェニアという国の歴史がこの短い時間のなかに凝縮されている。農民一揆の指導者グレーゴル・コバルの名前でハプスブルク帝国の時代と、チトーの肖像画で現代のユーゴスラビアが。

フィリップは、グレーゴルが戦地で行方不明になってからの父親の落ち着きのなさの理由を説明しようとする。それは、父親が祖父から、祖父が曾祖父からという具合に受け継いできたもの、「余所者なのだ」という意識、「流刑になっていたのだ」という意識である。そのような意識は、自分の家がトルミン農民大一揆の首謀者グレーゴル・コバルの家系であり、彼が処刑され子孫が追放された、という一族の歴史から生まれたのだった。そのため、長男は皆グレーゴルという名前をつけられた。

四

スロヴェニアでの最初の夜、フィリップは自分がイエッセニツエに来るときに列車で通ったトンネルを思いだし、トンネルをめぐらにしようと思いつく。トンネルの闇のなかで眠ろうとするが、眠れない。「うとうとしたかと思え

ば、すぐ数秒間にも無限の時間にも思われる悪夢に襲われるのだった。」

眠ったのか眠らなかったのか、自分でも分からない状態でフィリップは立ち上がり、まだ暗いなかトンネルを出て行く。しかし、谷の輪郭ははっきりと見えていた。次第に夜が明けて、目の前に風景がひろがり、フィリップは深い感慨に襲われる。

この水平の風景、言い表すことのできる地上の土地こそが「世界」なのだ、と僕は理解した。そしてこの風景に、と言ってもサヴァ川の谷ということもユーゴスラビアということも同じではないのだが、この風景に、僕は今や「僕のくに (Land) よ！」と呼びかけることができた。

使い古された表現ではあるが、トンネルの闇のなかでフィリップは一度死に、トンネルを出て再生し、目の前のスロヴェニアの谷の風景に「僕のくによ！」と呼びかけることができた。死と再生の体験による父祖の「くに」、スロヴェニアの発見である。

このように高揚した気分にあるフィリップは、スロヴェニアという国、いや国としてはユーゴスラビアの一部である地域の人々に大変な思い入れを寄せる。それは、自分が生きてきたオーストリアという国との対比においてである。フィリップはそのことを自問する。

なぜ、このユーゴスラビアの、夜明け前の、一見まったく無愛想な工場地帯、見えない手によって未来永劫動

かし続けられていくように見える工業地帯で、今まで自分のくにで知っていた労働者のイメージ、否、人間一般のイメージとはこうもちがった印象を与えられたのだろう。

これまで思ってきた人間のイメージとの大きな差異の生まれる原因を探して、フィリップは次のような結論に至る。

それはたんなるイメージや感覚の問題ではなかった——それは一種の確信だった。二十年近く、場所のない国家の中、冷たく無愛想で、人食いの国のような国家に生きてきて、初めて、僕のいわゆる祖国のように、義務教育を受けるとか、軍役やそのかわりの仕事や、ようするに「出席」していなければならないような仕事を果たせとは言われない国、逆に僕のほうからは、自分の祖先の国だったのだし、見知らぬものすべてを含めて自分の国なのだ、ついに言えるような国、そういう国への闘に立っているのだという確信だったのだ。ついに、僕は国家をのがれた。

オーストリアという国家への嫌悪感と裏腹な高揚した意識で、フィリップは叫ぶ。「ついに、僕は国家を逃れた」と。「くに」ではあるが国家ではない地、それがユーゴスラビアであり、スロヴェニアである。まさしくハントケ自身による国家の廃棄という、アナキステイックな信条の吐露である。

このようなアナキステイックな視線を獲得すると、フィリップは、「祖国」オーストリアとは異なるユーゴスラ

ピアでの事物と名詞の単純な対応関係に目を見開かされる。

店の看板も訳すことができた。みんな簡単、簡潔だったのだ。北や西の国のように妙にひねった名前はなくて、牛乳屋には牛乳、パン屋にはパンという意味しか書いてなかった。そしてムレコやクルフという言葉も訳すのは、別の言葉に翻訳するというよりはイメージへ、言葉の幼年期へ、ミルクやパンの原初のイメージへと翻訳するようなものだった。

フィリップは、戦場で行方不明になった兄の持っていた古いスロヴェニア語の辞書を読み進んだ経験を出す。スロヴェニア語はなによりも田舎の農民の言葉であった。「彼は牛が尻尾を使うみたいに自分の舌をうまく使う」、「おまえは風のない日の霧みたいなのろまだ」、「あなたの家は火事の焼け跡みたいに寒い」といった比喩がその典型である。

他方、スロヴェニア人は、「かつて一度も自分たちの政府というものを立てたことがなかったから、国家や官庁に関することや、それに概念的なことを表すには、ドイツ語やラテン語という支配者の言語の直訳のような単語で済ませざるを得なかった。」

そのようなスロヴェニア語の特徴から、そのような言葉を使う「繊細でもあれば粗野でもある民衆のイメージが、辞書を読んでいるうちに生まれてきた。」それは、「貴族階級などというものもなければ、行進などというものも、大土地所有などもない（土地はみな貸借だった）」という世界のイメージだった。フィリップのこのイメージは、国家

のない世界、支配・被支配のない無階級の世界、つまり原始共産制の世界に近いと言えるであろう。

そのような原始的な世界の手がかりとして、フィリップは高校の教師から教えてもらったマヤ文明のことを思いだす。教師によれば、「マヤの人々は、決して国家を形成することはなかった。」まさしくスロヴェニア人と同様に、マヤの人々も国家のない民族であった。教師によれば、マヤの人々が国家を形成することがなかったのは、ユカタン半島にユーフラテス河やティグリス河、ナイル河のような「国家を形成するような大河がなかったからだ。」

マヤの没落は、私的な礼拝が公的な崇拜儀式を押しやったときに始まった。家族はそれぞれに自分たちの礼拝堂を建て始め、人々の結び付きが壊れてしまった。石柱に刻み込まれた絵文字が途中で放棄されていることがその証拠である。最後の記銘は、九〇〇年に、スペイン人たちが「自由のサバンナ」と呼ぶ草原に近い場所の石柱に彫り込まれたものである。

そこからフィリップは兄グレーゴルのスロヴェニア語の辞書につけられた印を連想する。マヤのピラミッドの階段には象形文字が彫られていた。その象形文字と兄が印をつけていたスロヴェニア語の単語が重なり合うのである。それに気づいてフィリップは強い憤りを覚える。「殲滅とは、ある特別な人間を、世界をまとめあげていたものと一緒で、世界を消し去ることだ。兄のような人間を殺すことは、(…)その言語自体を殺すに等しいこと、世界大戦の中でもっとも野蛮で許しがたい犯罪行為だった。」

フィリップの頭のなかをめぐっていたのは、農民蜂起のときのスローガンである「Recht」という言葉だった。「われわれは昔からひとつのレヒトを持っていたのであり、そのレヒトは弱まってはならないものだった。だがそれは、われわれが掲げるのをやめたとたんに衰弱してしまった。しかしわれわれのレヒトとはいったい誰に要求すべきもの

だったのか。」Reithは「権利」という意味であるが、ここで言われているReithは近代的な「権利」という意味ではない、もっと原初的な大地に根差した生き方のようなものであるだろう。したがって、レヒトを要求する相手は具体的に見えないのである。

五

フィリップは、マヤの人々やスロヴェニアの人々が国家を形成することがなかったという歴史に対して、郷愁のような思いを持つ。しかし、彼らがなぜ国家を形成しなかったのかという理由について探究しようとはしない。あるいは、マヤの人々が国家を形成しなかった理由を「大河がなかったから」と大雑把に説明した教師の説明で満足して、それ以上の探究をしようとしない。逆に言うと、人類はなぜ国家を必要としたのか、という問題に関心を向けようとしない。

これに対して、国家形成の根拠を探究した思想家がいる。それは、マルクスの盟友、フリードリヒ・エンゲルスであり、彼の『家族、私有財産および国家の起源』が国家形成の秘密を探る探究の書になっている。この書は副題に「ルイス・H・モーガンの研究に関連して」とあるように、アメリカの文化人類学者、モーガンの『古代社会、野蛮から未開をへて文明にいたる人類進歩の経路に関する研究』に依拠して、唯物史観の立場から人類が国家を形成する過程の探究を行った。

エンゲルスは、人類の歴史を「野蛮」、「未開」、「文明」の三時期に分類するモーガンの理論を紹介する。最初の二

時期はさらに三段階ずつ区分けされている。

一 野蛮

- ① 下位段階 人類の幼年時代。人類は発祥の地である熱帯または亜熱帯にとどまっていた。言語の形成がこの時代の主要な成果である。
- ② 中位段階 魚類の食用への利用と火の使用をもってはじまる。この両者は対をなすが、魚類は火をつかうことによってはじめて完全に利用できるようになるからである。
- ③ 上位段階 弓矢の発明をもってはじまる。これによって野獣は日常の食料となり、狩猟は正規の労働部門の一つとなった。

二 未開

- ① 下位段階 土器の使用ではじまる。未開期の特徴的な契機は、動物の馴致・飼育と植物の栽培である。
- ② 中位段階 東では家畜の馴致をもってはじまり、西では灌漑による食用植物の栽培と、建築へのアドーベ（日干し煉瓦）や石の使用をもってはじまる。
- ③ 上位段階 鉄鉱石の溶解をもってはじまり、表音文字の発明とその文書記録への利用によって文明へ移行する。

野蛮、未開という区別、さらにはその内部でさらに三段階に分ける区分は、少なからず単純すぎて単線的な進歩史

観という印象を与えるが、考古学的な発見の状況から言えば、おおよそ妥当なものと考えられるのだろう。いずれにせよ、このような区別、区分に基づいて唯物史観が構想されていたことは確認すべきである。

以上のような前提のもとで、エンゲルスはまず「家族」の問題を取り上げる。家族は、「すべての野蠻・未開民族では親族関係が社会秩序に決定的な役割を演ずる」からである。原始史の研究から明らかになるのは、「男たちが多妻制の、そしてその妻たちも同時に多夫制の生活をおくり、その共通の子たちもまた彼ら全員に共通のものと見なされる、という状態」である。すなわち集団婚というべき状態があったことである。そこからまた、多様な婚姻の形態が生まれていった。哺乳類の性生活を観察すると、「あらゆる形態、すなわち無規律のもの、集団婚に類するもの、一夫多妻制、一夫一婦制が見出される。ないのは一妻多夫制だけである。」一妻多夫制は、「人類だけがなしとげることができた。」そのような一妻多夫制が「母権制」の前提であり、このことを発見したのがスイスの文化人類学者、バツハオーフェンである。エンゲルスの論証を見ていこう。

母権制においては、夫が死亡した場合、死亡した子は父の氏族には属さないで、母の氏族に属した。したがって子は母の財産を相続したが、父の財産を相続することはできなかった。しかし、富が増加するに比例して、富は男に女よりも重要な地位を与え、男は相続を自分の子に有利なようにくつがえそうとした。そして実際にくつがえされた男の氏族員の子孫は氏族内にとどまるが、女の氏族員の子孫は排除されて父の氏族に移ることになった。

母権制の転覆は、女性の世界的な敗北であった。男は家のなかでも舵をにぎり、女は品位をけがされ、隷属させられて、男の情欲の奴隷、子どもを生むたんなる道具となった。このようにして母権制は父権制に敗退した。しかし、確立した父権的な氏族制度も、分業とその結果である諸階級への社会の分裂によって破碎される。そして国家に

よって置き換えられる。

エンゲルスはこのようにして、「家族」から「国家」へと視野を向けていく。

氏族制度の廢墟のうゑに國家が起こつてくる過程には次の三つの主要形態がある。

1 アテナイでは、國家が直接にまた主として、氏族社會そのものの内部で發展する階級対立から發生する。

2 ローマでは、氏族社會は、その外部にあつて權利なしに義務を負う多数のプレブス（平民）のただなかで、閉鎖的な貴族層となる。プレブスの勝利は、古い血族制度を破砕して、その廢墟のうゑに國家を樹立し、やがて氏族貴族層もプレブスとともに國家のうち完全にとけこんでしまふ。

3 ドイツ人の場合には、國家は、広大な外部領域の征服から直接に發生するのであつて、この領域を支配する手段は、氏族制度によつては与えられない。

以上のように、國家は、けつして外部から社會におしつけられた權力ではない。またヘーゲルが主張するように、「人倫的觀念の實現」、「理性の形象および實現」でもない。むしろそれは、一定の發展段階における社會の產物である。それは、この社會が、解決できない自己矛盾にまきこまれて、自分では取り除く力のない、融和しがたい対立物に分裂したことの告白である。これらの対立物、すなわち抗争しあう經濟的利害をもつ諸階級が、自分自身と社會を消尽させないために、外見上社會の上に立つてこの抗争を和らげ、これを「秩序」の枠内に保つべき權力が必要となつた。そして、社會から出てきながらも、社會の上に立ち、社會からますます疎外していくこの權力が國家なので

ある。

古い氏族組織と対比して国家を特徴づけるものは、第一に、領域による国民の区分である。第二は、公権力の樹立である。この権力は、自らを武装力として組織した住民とは、もはや直接には一致しない。この特殊な公権力が必要なのは、諸階級への分裂が生じて以来、住民の自発的な武装組織が不可能になったからである。

このように国家成立の必然性を論じたあとで、エンゲルスは国家の本質を次のように述べる。

「国家は階級対立を制御する必要から生じたのであるから、しかしそれは同時にこれらの抗争のただなかで生じたのであるから、それは通例、もつとも有力な、経済的に支配する階級の国家である。そしてこの階級は、国家をつうじて、政治的にも支配する階級となり、こうして被抑階級を抑制し搾取するための新しい手段を獲得する。こうして、古代国家は、なによりもまず奴隷を抑制するための奴隷所有者の国家であったし、同様に封建国家は、農奴・隷農的農民を抑制するための貴族の機関であったし、近代的代議制国家は、資本による賃労働の搾取の道具である。」

国家をある階級の他の階級に対する支配を保証する装置として分析した上で、エンゲルスは次のように国家の死滅を予言する。

「こうして、国家は永遠の昔からあったものではない。国家なしにすんでいた社会、国家や国家権力を夢にも知らなかった社会が存在していた。諸階級への社会の分裂と必然的に結びついた一定の経済発展の段階で、この分裂によって国家が一つの必然事になった。いまやわれわれは、これらの階級の存在が一つの必然事であることをやめたばかりか、生産の積極的な障害になるような生産の発展段階に、急ぎ足で近づいている。それらの階級は、以前それらが発生したのと同じように、不可避免的に滅びるであろう。それらとともに国家も不可避免的に滅びる。生産者たちの自

由で平等な協力関係の基礎のうえに生産を新たに組織する社会は、全国家機関を、そのばあいにはかるべき場所へ移しかえる。すなわち、紡ぎ車や青銅の斧とならべて、考古博物館へ。」

歴史の必然のなかで生まれてきた国家は永遠に存続するのではなく、歴史の必然としてまた消滅する。その根柢をエンゲルスはここで挙げてゐる。それは、「国家なしにすんでいた社会、国家や国家権力を夢にも知らなかった社会が存在していた」からである。しかし、国家がない人類の時代があったからこそ、将来また国家がない時代が訪れるであろう、というエンゲルスの論拠はユートピア的であり、十分に説得的な論拠にはなり得ないように思われる。エデンの園にアダムとイブが暮らしていたような無垢な時代が将来必ず訪れるはずだ、というキリスト教的なユートピア思想に対応する唯物論的なユートピア思想と呼べるかもしれない。

六

エンゲルスによる「国家の消滅」の予言をハントケがもし読んでいたら、強い共感を抱いたことだろう。『反復』の最終章「自由のサバンナと第九の国」において、国家消滅後の世界を主人公のフィリップが目の前に見ているからである。

フィリップはカルスト台地に向かう。その際に、マヤ文明に詳しくった教師の言葉を思い出す。マヤの土地、ユカタン半島の石灰岩台地は、トリエステ湾の北に広がる高原にある本家の「カルスト」の地とは「裏返し」の形をしている。「カルスト」Karstというドイツ語はスロヴェニアのクラス地方に語源がある。スロヴェニア語ではKrasとい

う。石灰岩が堆積して侵食された地形である。マヤのカルストも地下に空洞の開いた石灰岩台地だが、地中海岸では無数の漏斗状の穴が開いているのに対して、ユカタン半島では塔や円錐の形で上に突き出しているからである。

したがって、教師の説によると、スロヴェニアの原カルストの人々は、マヤとは「裏返し民族」でなければならぬ、というのだ。フィリップはカルスト台地出会った人々について次のように思いをめぐらす。「僕はカルストでは、ひとつの民族というものには（そしてその盛衰にも）出会わなかった。その代わりにただここに住んでいる人々」に出会った。つまり国家形成の前提としてのまとまりのある「民族」はなく、ただ、ばらばらに住んでいるまとまりのない人々に出会ったというのである。その上で、カルスト台地で自分が感じた「自由」の感覚がどこから生じたのか、と考えをめぐらす。

「答えとしてとりあえず思いつくのは、カルストの風のせい、ということだけだ（もしかすると太陽も関係しているかもしれない）、「特に南国には、海辺に住む古い民族がいて、ある時期になると、かつて住んでいた高地に戻り、そこでひそかに風を祀り、いわば風の聖別を受けて世界の法 *Gesetz* に与る、そんな話はなかっただろうか？

僕はカルストの風を、そんな聖別として何度も何度も味わった——だがそれでどんな掟 \parallel 法に与ったことになるのだろうか？ そもそもそれは法だったのだろうか？」

ここに書かれている「法」*Gesetz* は「法律」という意味ではないだろう。人間の関与しない自然法則や仏教的な世界の「掟」に近い意味であるだろう。フィリップがカルスト台地で感じた底知れぬ「自由」の感覚は、人間社会の強制を含む「法律」とは縁のないものであるのは明らかである。多数の人々を統合し、ひとつの国家を形成するために、法制度がもっとも大事な基盤である。成文法にせよ慣習法にせよ、法のないところには国家は存在し得ない。エ

ンゲルスの考えた「国家の消滅」という未来世界も、その前提として法律が不要になっていることがあるだろう。支配階級による被支配階級の支配の装置が国家であり、その支配を日々実践する制度として法律がある、とエンゲルスは考えていた。

フィリップがカルスト台地で感じた「自由」の感覚は、つまるところ法律により人々ががんじがらめにされている国家からの離脱感だったと思われる。その証拠に、カルストの駅のひとつで最後の旅客列車を待っているとき、フィリップはあることに気づく。

僕は自分が目的地の一つに來ていることに気がついた。兄を見つけようというつもりはもともとなかった。そうではなくて、兄のことを物語ること。——そしてまた一つの記憶がよみがえってきた。前線からの手紙の一つで、グレーゴルは、われわれのスロヴェニアの先祖の言葉では「第九の国」と呼ばれる伝説の土地のことに触れて、それがわれわれみんなの憧れの目的地だと言い、こんなことを書いていた。「いつかわれわれみんなが、復活祭前夜、第九の国の第九の王の結婚式に向かう飾りたてられた幌付き四輪馬車の中で再会することができますように——神よ、わが願いを聞き届けたまえ！」。僕は今、兄の敬虔な望みはこの地上で実現できることだと思つた——書くことによつて。

これはまさしくカルストの地が兄の目的地であることの表明に他ならない。国家ではない「くに」としてのカルストの地そしてスロヴェニアは、「第九の国」という伝説の地に他ならない。自らの意志とは無関係に国家により戦場

へ駆り出され異国の土に眠ることになった兄が願った国家ならざる「くに」というユートピアである。そのようなユートピアに自分が来ているという幻想をフィリップは見ている。ただ、そのような国家の消滅は、エンゲルスのように階級闘争により実現されるのではなく、「書くこと」により実現される、とハントケは「書く」のである。

テキスト

Peter Handke: Die Wiederholung. (suhrkamp taschenbuch)

翻訳は、阿部卓也訳『反復』（同学社）を使用した。

エンゲルス『家族・私有財産・国家の起源』（岩波文庫）